
不思議の国の、僕とミミズと自分探し

太郎鉄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議の国の、僕とミミズと自分探し

【Zコード】

Z0322B

【作者名】

太郎鉄

【あらすじ】

目が覚めると、僕は何もかもを忘れていた。何かがずれている不思議の国で、ミミズに導かれながら、僕は失った僕自身の欠片を探す旅に出る。途中、タコとイカの戦争や、教えたがりの誘惑、情欲の街の試練とか、様々なものに巻き込まれながら、少しづつ、僕は僕を取り戻していく。全ての欠片が揃った時、僕は——。

1話 //ミズ

体全体に熱を感じて、僕は目を覚ました。すると、熱の正体が太陽光である事に気付く。

僕は目を細めてから、現状の確認を始める。まずは起き上がりないといけない。

周囲を見た。オレンジ色の地表がどこまでも続いている。ここは荒野のようだ。見渡す限り、草木一本生えてない。

さて、当然の疑問が僕に芽生える。

僕は何故、こんな所にいるのだろうか。記憶を振り返つてみる。

.....?

おかしい。何も思い出せなかつた。僕が誰で、どのような人生を送ってきたのか、皆目見当もつかないのだ。

「やあ、随分よく眠つていたね」

随分とかん高い声が聞こえた。声変わりをする前の子供の声。男の子なのか女の子なのかの判別がつかない。僕は周囲を見渡す。誰もいない。

「そつちじゅない。下だよ、下」

下には、一匹のミミズがいた。体の半分を僕の顔に向けて浮かせ

てこる。//ミズに目があるのかは知らないけれど、僕を見つめているように見えた。

「そう。ここだよ

「君が、喋っているの？」

「ただけど、それが何か？」

毅然とした態度（あくまで印象）に、僕は返答に困った。

「たしか、//ミズは喋らない生き物だったよね？」

「失敬だな。//ミズが喋らないなんて、一体誰が決めたといふんだい？」

「一体誰が決めたんだろう？」

「喋らない生き物なんてどこの世界にもいやしないのか」

//ミズはぴょこんと飛び跳ねて、僕の肩に乗った。

「ジャンプまで出来るんだ」

「当たり前だよ。反動といつものを使えば、ジャンプくらい誰にでも出来る」

////////ミズは//ミズの割に、特有の粘り気といつか、水氣が一切感じられなかつた。乾いているという訳でもなさそつだけど、とにかく、//ミズっぽい質感じやないのだ。何というか、そう、人間の細い指。

そんな感じだ。

僕はそれについて尋ねてみよつか迷つたが、そんな事より、聞かなければならぬ事があるのでひとまず後回しにした。

「ここは、どうだらう?」

「おお、いけない。そうだったね。それは当然のクエッシュョンだ。少なくとも、僕がどうして喋れるのかなんていう質問より、遙かに真っ当で有効な問いただよ」

ミリーズは恐らへば頭と思われる部分を、上下に揺らした。頷いて、いるのかな?

「いいかい?君はたつた今、この世界に迷い込んできた。つまり、君が元々住んでいた世界とは別の、この世界にね。まあ、それ自体は別段珍しい事じゃない。よくあるんだ。君みたいな少年は、実によく迷い込んでくる」

僕は早速、ミリーズの話についていけなくなってしまった。

「大事なのは、ここが何処なのかといつ事よりも、どうしてこんな所に君が迷い込んできたのか、だ」

それは確かにその通りだった。僕は腕を組んで考えるが、やはり何も思い出せない。

「何も思い出せないだらう?当たり前だ。残念ながら、君はバラバラになってしまっているんだ。バラバラにならなきゃ、こんな所に迷い込む事なんて出来やしないよ」

僕は特にバラバラになつていないので、それについては反論してみた。

「違う。体の問題じゃない。気持ちとか、心とか、精神とか、そういう類の代物がバラバラなんだよ」

「よく解らないけど、だから僕は記憶を失つてるの？」

「そう。色んなものを失つてる。例えば恐怖だ。普通はね、君のような少年がこんな荒野に一人で放り出されたら、まずは怖がつてしかるべきじゃないか。それがどうだい。君は驚く程冷静だ」

そう言われれば、ちっとも怖くない。

「君はこれから、この世界で、バラバラになつた自分の欠片を探さなくてはならないんだよ」

///イズの言葉は一方的で、かつ強引だった。いきなり探さなくてはならないと言わても、///イズの言つ《そういう類》の代物が、バラバラになるなんて事が本当に有り得るのかすら、僕には判断がつかないのだ。

「戻惑つているね？まずはそれでいい。とりあえずは流れに身を任せてみるんだ。大丈夫。君の欠片探しには、僕もきちんと付き合うのだから」

肩から聞こえる///イズの声は、自信に満ち溢れていた。

「でも、なんで見ず知らずの僕をわざわざ助けようとしてくれる

のや? 「

「それが僕の仕事であり、存在意義なんだよ。そんな事は君が気にする事じゃない。さあ、行こう。こんな所にいつまでもいたんじゃ、//ミズでなくても干からびしまう」

僕はもう一度、周囲を見渡した。行くと言つても、こんな荒涼とした荒野を、僕はどうやら進めばいいんだ。

「前に進むんだよ。決まってるじゃないか。どのような事態に直面しても、前進さえ怠らなければ、物事はある程度好転するものなの。もちろん、時には立ち止まる事も必要だがね」

でも、今はやはり進む時だ、と、//ミズは付け加える。少なくとも、今の僕には//ミズの言つどおり、前へ進むしか方法がないようだ。

太陽の熱が容赦なく僕達を焦がし続けていく。一時間程歩いた頃、前方に寂れたホームのようなものが見えてきた。何もかもに忘れられた、ある種の諦めのような雰囲気を漂わせて、それは荒野の上にひっそりと存在していた。

僕と//ミズはホームの上で列車を待つ。地面に敷かれた線路が、このホームの外界との繋がりを何とか保たせているように見えた。

「わあ、いよいよ始まるぞ。覚悟はいいね?」

「何の覚悟だい」

相変わらずミニアズは僕の肩に乗っている。

「何かを探すという事は、それがどんなに些細なものだつて、それなりの労力を使うんだよ。君の場合、何せ相当な数の欠片を、この世界から見つけ出さなきやならないんだ。君が使う労力は、はつきり言って途方もなく大きい」

「それが見つかれば、僕の記憶も戻るし、元々いた場所に帰れるんだよね？」

「もちろんだと。君が諦めない限りはね」

「解ったよ。僕はとにかく、労力といつもの驅使して、何とか欠片を探し出す。道は、君が教えてくれるんだよね」

僕の問いにミニアズが頷くのと、彼方から蒸気を青空に上らせて、機関車が走つてくるのが見えた。機関車がホームに停車すると、僕達は四号車に乗車する。

中はなかなかに快適だった。赤いソファーが向かい合わせにいくつも並んでいて、座り心地も抜群にいい。しかも、客は僕達しかいないのだ。

真ん中の席に僕が座ると、ミニアズは肩から飛び降りて、対面の席に移動した。タイミングを合わせたように、汽笛が車内まで響いてきた。

「それで、この列車はどうに向かうの？」

「タツの街だ」

タコ？

「タコの王と僕は、古い顔馴染みなんだよ。君の欠片について情報を得られるかもしねー」

「ゴトゴト」と音をたてて、列車が動き出した。

「うん、それで、僕は何の欠片から探せばいいのかな？」

果たしてどれ程の数の欠片があるのかは判らないけど。

「そうだね。まずはやはり、あつた方が何かと便利なものから探

そう

「例えば？」

「名前、とかね」

」のよじにして、僕の欠片探しが始まつた。

2話 タコの街

トンネルを抜けると雪国ではなくて、ただの山道だった。ただの山道とは言つても、常識からしたらやつぱりおかしい。トンネルに入る前まで、窓の外は荒れ果てた荒野だったのだ。いきなり縁豊かな山道とは、僕でなくたつてあんまり納得はいかないだろう。

「ああ、もうすぐタコの街に着く。準備はいいね？」

「特に用意するものがないからね。大丈夫だよ」

列車は山道をどんどん登っていく。時折、小鳥が木々の上で羽根を休めているのが見えたので、ここにはきちんと生命の営みというものがある事を確認出来た。一安心。

「そうそう。一つ注意しておく事がある

ソファーから、ミニマズが窓に飛び移った、というか張り付いた。

「タコの街の連中は基本的には優しいし、気きくな者ばかりだ。僕に対してはもちろん、君にもある程度は友好的に接してくれるだろう。ただ……」

「ただ？」

「イカの話だけはしちゃ駄目だ。タコはイカが大嫌いなんだよ

特に、タコに対してもイカの話をしようといつ発想が僕にはなかつ

た。

「うん、解つた。タコはイカが嫌いなんだね」

「ああ。彼らはもう長い事争い続けているからね。しかも現在、戦況はイカに分があるんだ。それで、タコは随分ピリピリしてゐるだよ」

タコとイカがどのような方法で争つてゐるのか聞いてみたいとも思つたけれど、話がややこしくなりそつたから、やめておく。

そういうしてゐる内に、列車は山道を越えて、荒野のよりは遙かにそれらしいホームにたどり着いた。少し先には（実際は随分先だけ）海が見えて、海の手前には、巨大な貝殻が規則的に並んでいる。

「あの貝殻は何？」

「タコの家だよ。そこら一体がタコの街なんだ」

ここからタコの街までは徒歩で行かなければならないらしい。僕はミミズを肩に載せて、緩い傾斜を、草木をかき分けながら降りていぐ。

やがて、タコの街が目前に見えた。

それから、その住人達もよく見えた。タコだった。僕の身の丈より少し大きなタコ達が、所狭しと、歩き回つている。

「なんで、タコが歩いているのかな」

「君だつて歩いてゐるじゃないか。僕の時といい、君にはちょっと

無粋な所があるね。そういう事は聞かない方が、君の人生は上手くいくよ」

でも、僕の元々いた世界では、ミミズは喋らないし、タコは歩かない生き物だったと思つ。記憶がないから断言は出来ないけど。

「真ん中に噴水が見えるだろ？その噴水の先が王の家だ。行こう」

僕はタコの街を歩き始めた。そこの中のタコの視線が突き刺さる。ひそひそ話が聞こえてきた。

「やだ。あの子、足が一本しかないわよ

「可哀想ねえ。事故にでもあったのかしら」

「イカにやられたのかもしれないわよ。イカは野蛮だから

「最悪ねイカは

「イカなんて、生命の屑だわ」

ミミズの言つとおり、かなりイカは憎まれてゐるようだ。それにしても、どのタコも同じようにしか見えないのは、僕がタコじやないからなのかな？

噴水の先にある、王冠の形をした貝殻に僕達は入る。ミミズは肩から降りて、先に話を進めてくると僕に断ると、するすると奥へ行つてしまつた。

貝殻の中は、思ひの他生活感に溢れていた。床にはピンクの絨毯が敷かれて、ベッドやら箪笥やら電気スタンドやらテレビやらが設置してある。奥に木製の扉があつて、そこから//ズと、もう一人の声がした。

「おお～～・//ズの一元氣にしてたかあ！」

「お陰様でこの通りだよ」

「よく来たなあ。まあゆっくりしていきなよ」

「そうしたいんだが、今日はちよつと仕事でね。会わせたい者がいるんだよ」

扉が開くと、//ズを乗せた王冠を被つたタコが、ゆっくりと僕に近付いてくる。

「ここの兄ちゃんかい？なるほど、確かにバラバラだわ」

「だらりゅ～欠片探しも楽じやないんだ」

タコ王は、僕の周りを一周する。

「よお兄ちゃん」

「じつも、初めまして」

「聞く所と見た感じによると、バラバラだつてな？」

「はい、やうやうじこんです」

「で、俺らタコ族に、助けを求めてきたわけだ」

足の一本を僕の肩に乗せて、大きな頭をウンウンと揺りすタコ王。

「はい。何か、情報があれば頂きたいなって」

「おうー何でも聞けやー」ジミーズと俺は昔からの大親友でな！
こいつがナメクジに襲われた時なんて、毎回俺が助けてやってたんだぜ

「おいおいタコ王。その話よしてくれ」

あははははとタコ王が笑っていたが、僕には何が楽しいのかさっぱりだった。

「でよ、何から探してんだ？」

「まずは、名前を」

「そ、うなんだ。タコ王、どこかで名前が落ちているのを見なかつたかい？」

タコ王は一本の足を胸と思われるあたりで組んだ。目を瞑つて考えているらしい。

「何で名前だ？」

僕が覚えてない事を云えよとするべく、タコ王の頭の上から、ニ

ミズの笑い声が聞こえた。

「待つてくれよ。君ともあるつものが、名前を落とした少年に名前を尋ねるのかい？」これは傑作だ」

「そうか。ついにやさうだな。違えねえやー。」

またまた笑い合いつた口とミズ。僕は収まるのを待っていた。

「ちよつと待ちな。確か、誰かが少し前に、名前がどうのって言つてたな。ええと、あれは……ああ、そうだーハチの奴だ！」

ハチ？ハチとはやつぱり蜂の事だろ？

「よし、ハチを呼ぶぜ」

「耳を塞いだほうがいい」

深刻そうにミズが言つので、僕はその通りにした。

「ハチイイイイー！！！！！！！！！！！」

家具が揺れた。筆筒が倒れて、電気スタンドの電球が割れる。耳を塞いでいなければ、鼓膜が完全に破れていたと思われる。

やがて、入口の方から、不機嫌そうな顔（やはり推測の域を出ない）をしたタコが、のつそりと姿を表した。頭には鉢巻を巻いている。

「なんすか？、もう『カ』い声出して。おばさん連中失神しちゃい

ましたよ

ガハハハハハハ。もちろん笑ったのは僕じゃなくてタコ王。

「紹介するぜ。ハチだ」

「八郎つす！ハチはやめてくださいっていつも叫んでんのこも～

「細かい事言つたハチ！お前、何日か前に、どつかで落ちてる名前見たとか言ってたよな？」

僕はタコ王と八郎の間に挟まれている。変な気分だった。

「ああ、海岸に打ち上げられてましたね、そついや

タコ王の赤い顔が一気に青白くなつた。

「海岸だあ？まづいじゃねえか」

「確かに、まづいね」

///ズとタコがお互いに相槌を打つ。何がどのよつこまづいんだるづ？

「昨日まで嵐だったんだ。何日か前じゃ、波にさらわれた可能性が高いぜ」

海の中じや、僕にはどうせつても探せない。///ズが僕の肩に移動して、囁きかけてきた。

「海はイカが支配してるんだよ。彼らタコは、イカに追い出されて地上に街を創ったんだ」

さて、どうしたものだろう。僕の欠片探しはいきなり難航し始めている。

タコ王は名前を諦めた方がいいと言つ。僕は、果たしてイカがどちらほど恐ろしいものか理解出来なかつたが、真つ赤なタコ王が青ざめているので、それはやっぱり諦めた方が懸命なんだと理解する。

「大王イカの野郎にはいつか田にもの見せてやるつもりだがよ、情けないが、今は無理だ。あいつら、俺達より足が一本も多いからな」

「ミリズ曰わく、タコとイカの戦力は足の数で決まるらしい。何の事や」

「さて、早速障害が生まれてしまつたが、君はどうする?・名前は諦めるかい」

「名前を諦めると、僕は元通りになれない?」

「いや、そんな事はないよ。実のところ、名前なんて大したものじゃない。別に今、君が勝手に自分を命名したって、それが新しい名前になるだけだ。もちろん、古い名前はどうかでヤキモチを焼くだろうがね」

僕は海の底に沈んでいるであつて、自分の名前の事を考えた。

「一つだけ言えるのは、君の名前は、恐らく今泣き叫んでいるだろ?といつて事だけだね。名前といつのは、持ち主から離れるとすぐに弱つてしまふ生き物なんだよ。彼らは精神的に脆いんだ。何といつても、名前だけじゃ個性なんてすぐ消えてしまうんだから」

なんだか、名前がとても氣の毒に思えてきた。別に、名前に罪はないのだ。それなのに、僕の知らない内に、僕から切り離されて、深くて暗い海の底を漂っている。

「探せるかな、名前…」

「もちろんさ。やるうとこいつ意志がある限り、とつあえずのところ可能性という火が消える事はない」

僕はこいつ、困難に直面した時に必要なものを絞りうとしたが、それがどんなものであるかが思い出せなかつたので諦めた。

「勇氣を」

////ズが言う。

「君が絞りうとしているのは勇氣だよ。どうかに散らばつた、君の欠片の一つ」

勇氣。そう。確かに、それは勇氣といつものだつたはずだ。

「だけど、失つてるから絞れなによ」

////ズは耳元で笑う。

「大丈夫。意志があれば見つかる。名前も勇氣もね。幸いな事に、意志だけは君の中に残つてゐるんだ。当面はそれだけで凌げるはずさ。大抵の困難はね」

しかし、タコ王は叫ぶ。

「話し進んでるとこ悪いけどよ。海じや協力出来ないぜ」

タコ王はベッドに腰掛ける。イカに対してもふてくされていくようだった。

「悪いが、他を当たってくんねえか」

僕はミミズに向かう。

「ねえ。どうすればいい?」

ミミズはそれには答えず、頭のなか田なか判らない部分をタコ王に向かう。

「構わないよ。だけど、海までの案内くらいは頼めるだろ? 彼も山を降りたばかりで、クタクタなんだよ」

僕は特にクタクタではなかつたけど、わざわざそれについて説明しようとも思わなかつた。

「ああ。それくらいなら力になれる。おい、ハチ。お前、今日のオクトバスに決定」

足の一本を八郎に向けるタコ王。勘弁してくださいよと八郎。面倒臭そうな顔をしている。ところで、僕がタコの表情について語る全ては印象と推測に過ぎないので、実際のところはどうなんだか解らない。

「うるせえ！タコは嘘つかねえんだよ基本的に。だけど現状イカの糞野郎の相手は出来ねえだろが。だから、せめて、最高の乗り心地をここに堪能させてやれや」

「え～、だつてこの前『お前の乗り心地が一番悪い』って俺に言ったの王様つすよ～」

足をうねうねさせるハ郎。僕でいいから、もじもじしている感じ。

「だあ～！文句ばつか言ひたんとたこ焼きにするだおめえ！」

勘弁してくださいよ。

僕とミミズはオクトバスという乗り物に乗っている。あるいは、僕とミミズはハ郎の頭に乗っている。

「座り心地はどうすかお客様～」

やる気のなさそうな声が聞こえた。実際やる気がないんだろう。素晴らしくスピードベース。歩いた方が多分早い。けれど、海までの道のりは起伏の激しい峠をいくつか越えなきゃならなかつた。広大な海から名前を探すという事がどれだけ手間のかかる作業かは想像出来ないけれど、それはとても体力のいる事だと思つ。だから僕は歩かない。

「乗り心地は最高だよハチ君」

僕の肩に乗つていいミミズが言つた。いつものを、確か皮肉と

「言つんだっただか。

「俺はハチじやなくてハ郎ですってば。失礼だな」

左の方で、草むらを兎が駆けていくのが見えた。

「あの兎も喋るんだよね？」

「ミリズに対しても、ハ郎に対しても受け取れる風に僕は質問する。答えてくれたのはハ郎。

「やだなあー、何言つてるんすか。兎が喋るわけないっすよ」

「「」の世に喋らない生物なんていないんだよね？」

僕はミリズに同意を求める。

「「」の世に、例外のないものもまた存在しないのさ」

なる程。「」のようにして僕は一つ賢くなる。

兎は例外。

四つ目の峠を越えると、ようやく海が見えてきた。山から見下ろした限りではそんなに遠くには見えなかつたんだけど、外はすっかり暗くなっている。

「はい到着~」

僕は砂浜に降りる。海だ。完全に海だ。広くて大きいのは大抵海だ。

「そう。広くて大きいのは大抵海なんだ。あくまで大抵だけどね///ズには僕の心が読めるらしい。僕には///ズの心が読めないので、少し不公平だと思った。」

「君は幸せを知らないからそんな事が思えるんだよ。さあ、名前探しだ」

「んじゃ、どうもした~」

八郎が後ろを向いて歩き出そうとした。後ろを向いても形が変わらないから夜になると前だから後ろだかよく判らなかつたけど。

「ハチ君。何処へ?」

「街に帰るんすよ」

「何を言つてるんだい。名前探しはどうなつた?」

僕は///ズの方が何言つてるんだいと思つた。恐らく、八郎も同意見。

「だつて、あつしの仕事はおもり海に送り届けるだけですよ?」

完全にその通り。

「違うよ。世の中には本音と建て前がある。タコ王はイカの手前、そんな事は言わなかつたが、僕らをわざわざ君に運ばせたのには、手伝えといつ本音が隠されているんだ」

小さく//ズが僕に耳打ちする。あくまで、僕の解釈ではねー。

「そんな馬鹿な。海つすよ？イカつすよ？」

「そうだよ。海にはイカがいる。イカは危険だ。侵入者に容赦しない生き物だ。だからこそ、君の助けが必要なんだ。泳ぐのは得意だろう？」

「いや、得意すけど、イカつすよ？」

「イカつすよ」

//ズが言い返す。

「イカつすけど、君はタコつすよ。海を知ってる。少なくとも僕達よりは遙かに。だから、君の力が必要なんだ」

八郎はぶつぶつ何か小言のようなものを呴き始める。だからオクトバスは嫌だつたんだ、大体王様が悪いつすよ、ああ帰つて寝たい。

「もし手伝つてくれたなら、君に僕から素敵なおもてなしがあるんだが」

その言葉に引かれるように、八郎が振り向く。なんすか？

「新しい名前」

「マジすかー..?」

「マジナ

「乗った!」

八郎とこう名前が泣いているような気がした。

僕とミミズと八郎は波打ち際に立つ。海は温かかった。海は広くて大きいけど、温かいというのはどうだらうと思った。

「さて、これから名前探しを始めるよ。何か質問は？」

僕は手を上げる。どうせひって探せばいい?

「潜つて探すんだ。他は?」

八郎は足を上げる。アテはあるんすか?

「無い。他は?」

僕と八郎は声を揃える。

勘弁してくださいよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0322b/>

不思議の国の、僕とミミズと自分探し

2010年10月11日11時13分発行